国語総合の傾向

はじめに

医療の専門家を目指して当大学への入学を希望されている皆さんは、いずれ医療専門職となって社会の様々な問題を抱えながら生活している人々とうまくコミュニケーションをとることが必要となります。そのためには、現代社会における人々のあり方を論じた文章を数多く読んで内容を理解し、それに対する自分の考えを持つことが大切です。筆記試験では、内容の読解までにとどめていますが、日本語を正確に読み、正確に書くことは大学での学習のスタートラインです。

傾　　向

1　マークシート方式による選択式です。

2　現代文２題で、その内訳は評論２題または評論・随筆各１題です。
　１問目の評論文の問題は科学・歴史・心理・哲学・文化など幅広いジャンルから出題される、やや硬質な文章で、内容把握が中心です。２問目の評論文または随筆文の問題は１問目よりやや柔らかめの文章で、内容把握のほか、さまざまな国語の知識が問われます。いずれの問題も高校の教科書レベルの文章が出題されます。

3　漢字の読み書きは必須で、語意、四字熟語・ことわざなどの知識問題も頻出しています。また読解問題は空欄補充、欠文補充、指示内容、内容説明、理由説明などの部分読解問題と全体読解問題（筆者の主張、内容一致など）に分かれます。

4　たとえ易しい印象を与える評論文であっても、受験生には馴染みのない評論キーワードが文中では使用されていますから、市販の入試問題集を解いたり、新聞や新書などを読んだりして、論理的、抽象的な文章に慣れておく必要があります。

5　評論文を読むための参考文献や、試験に際しての問題の取り組み方など、試験対策についてはオープンキャンパスの対策講座で詳しく解説します。

6　センター試験と比べると、本文の分量も少なく、選択肢の長さも短いので、はるかに取り組みやすい問題です。

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

テレビを通して遠くで起こっている他者の苦しみを見る（戦場、被災地、事故現場等々）ところに生じるその被写体にされている人々への気遣い（のなさ）、ケータイで通話するところに生じる通話相手に対する気遣い（のなさ）、インターネットで誰かについて書き込みをすること（誹謗中傷等々）で多くの人々を巻き込みつつそこに生じるその誰かに対する気遣い（のなさ）など、様々な[ア]メディア利用の場面で〈繋がる〉他者に対するモラル、倫理が問われるはずなのだが、メディアを媒介としているおかげでメディア利用者はそうした問いから免除された中で他者と向き合うということが許されているように思われる。

例えば、遠方で苦しんでいる他者をテレビ画面を通じて見ている時、「お茶の間」で気楽に見ていても誰にも責められることはない。ケータイで話している時、相手が真剣な話をしているのに、テレビを見ながら話しても気づかれずにいるなら責められることはない。これとは逆に、この同じ場面がメディアを介してなされていない場合を想像するなら、苦しんでいる他者を目の前にして何もせずにいることには後ろめたさを感じるだろうし、「対面的」状況で相手が真剣に話している時によそに意識を向けることは相手に不愉快な思いをさせるだろう。つまり、「対面的」状況では必要である道徳的な振る舞いがメディア利用の場面では不要になるということはもはや当たり前のことになっている。が、しかし、いま一度[(1)]その深刻さを考え直してみる必要がある。

メディアの「利便性」の観点からすると、メディアを使えば遠い場所に〈繋がる〉（パイプが繋がるように）という側面だけに目がいきがちだが、しかし事実として、メディアによって〈繋げられて〉いるというまさにそのことによって「向こう」との間に或る種の壁が作られているというところにも目を向ける必要がある。この壁が、気遣いを働かさずに[a]スむ状態をもたらしている。「対面的」状況とは異なり、メディア利用の状況では、例えば通話相手の前に「気を張って」向かい合う必要はなくなるということがある。（1）

人と「対面的」に話す場合、最低限の礼儀はわきまえておくことが必要である。しかしここで問題にしたいのは「対面的」な状況での相手に対する礼儀作法、道徳[b]キハンという「法」の問題以前の段階である。すなわち、他者の前へと自分が〈現れる〉という段階である。礼儀をわきまえる、わきまえない以前に、相手に対していわば暗闇の中から自分を〈現れ〉させる、あるいはその他者の視線へと自らを〈曝す〉という段階があり、この時すでにその〈現れ〉、〈曝し出し〉には或る種の〈覚悟〉が伴われるのである。〈覚悟〉とは、時には、身なりをきちんとしておくというものであったり、時には、（心理的に）距離を置いて話すということであったり、時には、簡単に笑い顔を見せるべきではないといった普段誰もが意識せずにやっているような心構えのことである。相手に無礼を働かないようにするためのこういった気遣い、あるいは慎みは、相手に対して自分を或る部分では「現れ

させ」、或る部分では「現れさせない」という振る舞いとしてなされているものである。

しかし、メディアを通して遠方と〈繋がる〉時、もはやこうした〈現れる〉ことに伴われるはずの〈覚悟〉の多くの部分が不要になる。苦しむ他者の映像が映し出されていても、「お茶の間」では気楽に見ることが許されてしまうのである。人はメディアの画面を通すことによって見ているものの前へと自らの［A］を現れさせ、曝し出すことを免除される。映像を見ている状況では、実際に「そこ」にいて相手を眺めている時のように「そこ」にいる自分自身に注意深く、気を張っている必要はない。こうして画面、受話器の手前にいることの気楽さに人は安住することを望むようになる。（２）

つまり、メディアは向こうに〈繋がった〉り、向こうから［B］を引き出したりする道具である以上に、自分を世界（他者）に曝し出すことなく、気楽なままで世界に関わるための道具として[c]チョウホウされているのかもしれないという側面が重要になってくる。

他者の苦しむ映像を見ていても、自分とは関係のない出来事としてそれから身を退きながら、しかしそれを見ているという事実によって、世界に参加しているという気分を感じていることができる。重要なのは、画面を通じて気楽に「いま現にあるこの世界」に参加しているという感覚であって、他者が画面の中で苦しんでいたとしてもそれについて考えても仕方がない、それは重要ではない、とでもいうかのように。［C］を「前にした」このような[イ]シニカルな態度が定着することに最もコウ[d]ケンした画面ということで言えば、やはりそれはテレビではないだろうか。

画面を〈見ること〉、映像を〈見ること〉は最初は、これほどまでに[(2)]怠惰に行なわれなかった。美術館の展示空間ではガク[e]ブチに納められた映像には畏敬が払われていた。そして画面を見る空間が映画館の暗闇へと〈撤退〉しても、まだ映像には畏敬が払われていた。しかし画面がさらに家の「お茶の間」のテレビへと〈撤退〉した時、おそらく映像に畏敬が払われなくなり始めたのである。そして今日さらに、画面が「お茶の間」からインターネット利用者の〈個室〉へと〈撤退〉し始めた時、画面内に罵詈雑言（ばり）が書き込まれるほどにまで画面は落ちぶれたのである。（３）

画面を見ることそれ自体が悪いと言おうとしているのではない。画面を〈見ること〉には、どんなものであっても、世界から退きこもる（注）ハイデガー的な意味で）ことが含まれている。もともと画面は、一種の瞑想の、あるいは思考の場所である。人は画面を見るために、いったん世界から、画面が壁にかけられた箱（美術館、映画館、家等々）へと退きこもる。しかしそれは、世界に地に足をつけていた時には見えなかった世界の光景を画面が目の前に開示してくれるからであり、こうして人は世界について〈思考し〉、瞑想することが可能になる。そして、人は、その退きこもったからもう一度自分にふさわしい仕方で世界へと《存在し》直すのである。

〈思考する〉という営みそれ自体に、世界から退きこもるということが［E］として含まれているのであり、画面を〈見ること〉は、本を読むことと同じように、この退きこもりつつ行なわれる思考することを実現するために役立つものなのである。

しかし、おそらくテレビの登場によって、退きこもることが思考することに仕えるものではなくなり[(3)]別のものと結びついたのである。そのため、［D］

画面は落ちぶれ、画面を前にして思考するということが以前ほどなされなくなった。しかしこうした事態をもたらしたのは、人間が堕落したからというようなことではない。繰り返すが、思考することの一条件であった退きこもりが、思考することとは無関係なところからやって来た或る運動に結びついたのである。その運動とは、世界から逃避する運動である。そのことによって、退きこもりは世界に在ることの〈気楽さ〉の追求になっていき、あるいは現代的技術のイデオロギーの一つである（身体的な）〈快適さ〉への追求になっていったのである。（４）

今日、いわゆる「（社会的）ひきこもり」という言葉で示される社会現象が到来したのは、退きこもりがこの結びつきを得た以降のことだろう。ハイデガーが言っていた《存在の退きこもり》には、このような意味での否定的な響きはなく、それはむしろ逆に、《存在》の或る種の慎み深さのような高貴な側面を示していたのである。《存在》はいわば高貴であるがゆえに、自ら世界へ現れずに自分自身へと退きこもることを望む、というように。したがって芸術体験とは、この自ら退きこもろうとする《存在》に対して畏れを抱きながら体験者が自らへとそれを引き留めようとすることの中で行なわれるものであるとさしあたり考えることができる。

したがって、ハイデガーの言う《存在の退きこもり》の観点から言えば、退きこもることそれ自体は悪いことではない。それは思考することの条件だったのだから。いつからか、退きこもりが世界からの逃避の運動と結びついて以降、それは否定的な運動に成り下がったのである。

そしてここで注意しておきたいのは、画面メディア（テレビ、インターネット、ゲーム等の画面）が普及したから退きこもりが起きたというような「技術決定論」を言おうとしているわけではないということである。逆である。世界からの逃避の運動と一体になった退きこもりの運動が、自らを実現するために、画面メディアが要請されたということである。メディア技術は、利用者も、そして発明した当人も知らない深い要請のもとにつねに世界に現れてくるのであって、(4)その逆ではない。（５）

（和田伸一郎『メディアと倫理』ＮＴＴ出版による）

（注）ハイデガー＝一八八九～一九七六年。ドイツの哲学者。

問(一)　傍線部ａ～ｅのカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

ａ＝ 1　　ｂ＝ 2　　ｃ＝ 3　　ｄ＝ 4　　ｅ＝ 5

a スむ

1 ショサイでくつろぐ。
2 サイミン術をかける。
3 コクサイを発行する。
4 借金をカンサイする。
5 サイハイをふる。

b キハン

1 社員をシンキ採用する。
2 人工衛星がキドウに乗る。
3 大きなキタイを背負う。
4 手先がキヨウだ。
5 ハンキをかかげる。

c チョウホウ

1 チョウデンを打つ。
2 内容がチョウフクする。
3 愚のコッチョウだ。
4 チョウゼンと構える。
5 景気回復のチョウコウが見られる。

d コウケン

1 ケンショウに応募する。
2 ケンキョな態度。
3 学者にヒケンする豊富な知識。
4 ケンジツな生き方を選ぶ。
5 ケンシン的に奉仕する。

e　ガクブチ

1　舞台でネツエンする。
2　鉄道のエンセンに住む。
3　列車がチエンする。
4　エンコをたよる。
5　交渉がエンカツに進む。

問(二)　空欄 A ～ E を補うのにふさわしい言葉を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。（同じ番号を二度以上選んではいけません。）

A＝ 6　B＝ 7　C＝ 8　D＝ 9　E＝ 10

1　世界　2　情報　3　空間　4　認識　5　条件　6　身体

問(三)　傍線部ア「メディア」、イ「シニカル」の意味としてふさわしいものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

ア＝ 11　イ＝ 12

ア「メディア」　1　道具　2　情報　3　交流　4　媒体　5　範疇（はんちゅう）

イ「シニカル」　1　冷笑的　2　独善的　3　理知的　4　虚無的　5　禁欲的

問(四)　傍線部(1)「その」が指している内容としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 13

1　遠くで起こっている戦争や災害のために他者が苦しんでいること
2　苦しんでいる他者を目の前にして、何もせずにいること
3　「対面的」状況で、真剣に話している相手に不愉快な思いを与えること
4　「対面的」状況では道徳的な振る舞いが必要とされること
5　メディア利用の場面では道徳的な振る舞いが不要になること

問(五)　傍線部(2)「怠惰に」とありますが、ここではどのような様子を表していますか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、そ

の番号をマークしなさい。 14

1　他者の苦しむ映像であっても自分とは関係のない出来事であるため、興味がわかず、いい加減な態度で見ている様子
2　画面の中の世界は遠くで起こっている出来事であるが、その現場に自分が居合わせているかのように注視している様子
3　画面が映し出す世界に直接身を曝していないために、自己のあり方に気を配る必要もなく、気楽にくつろいでいる様子
4　画面の中で苦しんでいる他者に何かしてあげたくてもどうすることもできず、それ以上考えまいとしている様子
5　画面を通して見ている世界は遠くで起こっている出来事であり、その現場に出かけるのも面倒なので、じっとしている様子

問(六)　傍線部(3)「別のもの」とは何ですか。ふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 15

1　画面メディア　　2　遠方で苦しんでいる他者　　3　「そこ」にいる自分自身
4　世界から逃避する運動　　5　画面を〈見ること〉

問(七)　傍線部(4)「その逆」とはどういうことですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 16

1　画面メディアが普及したから退きこもりが起きたように、人は自らの目的を実現するためにメディアを発明するということ
2　画面メディアが普及したから退きこもりが起きたように、新しいメディア技術が人々の行動の仕方を決めているということ
3　画面メディアが普及したから退きこもりが起きたように、メディアは世界からの逃避の運動に拍車をかけているということ
4　退きこもりの運動が画面メディアを要請するように、人々の否定的な運動がメディアの発明と普及を促進するということ
5　退きこもりの運動が画面メディアを要請するように、新しいメディア技術はその利用者の要請によって登場するということ

問(八)　本文から次の文が脱落しています。本文中の（1）～（5）のどこに戻すのがふさわしいですか。後群のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 17

つまり画面はこの時、「便所の落書き」のようなものにまで成り下がったのである。

1（1）　2（2）　3（3）　4（4）　5（5）

問(九)　本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号をマークしなさい。（解答の順序は問いません。）　18・19

1　テレビのある「お茶の間」は、世界から逃避しつつ世界に参加している気分を味わえる空間となっている。
2　メディアを通して遠方と繋がった結果、他者との結びつきがより緊密になった。
3　直接対面して話すよりも、電話で話した方が気楽で、コミュニケーションもうまくいく。
4　テレビというメディアは世界から逃避しがちな者を世界に参加するように促す。
5　画面というものは本来、畏敬の対象であると同時に、瞑想や思考の場所であった。
6　人間はテレビのせいで世界について思考することを停止した結果、堕落してしまった。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私が記憶するかぎり、子供の頃から、夢想に[a]耽ることと、文章を書くことは、私にとって、ある快楽を意味していた。ちょうど絵を描くのが好きな子供がいるように、私は、文章を書くのが好きな子供であった。好きだから、他の子供より多く書いただろうし、本を読むときにも、無意識に、表現のほうに心がむいていたに違いない。当然、作文は私が最も得意とする課目であった。

（ イ ）文学書を読むようになると、どうも「書くこと」が好きだという文学者が妙に見当らないのに気がついた。いずれも骨を削る苦しみを[b]嘗め、ある表現を得るために幾日も幾夜も苦悩の時をすごすような気配なのである。「書くこと」が好きだとは、どうも言い出しにくい雰囲気があることはたしかだった。

当時の文芸雑誌にも二十一枚とか四十三枚とか原稿用紙の枚数が書いてあったが、私には、それが、こうした苦行の度合の報告のように思え、何か痛ましいような、おそろしいような気持を覚えた記憶がある。

しかし志賀直哉や芥川龍之介、横光利一という諸作家の文章を読むと、いかにも自分の表現や[c]語彙が貧弱に思えた。中学の終り頃、私はとくに志賀直哉や横光利一の文章で気に入った箇所はノートにわざわざ写したり、原稿用紙に書いたりした。原稿用紙に書いたのは、文章が、活字になるとき、どんな効果を持つか、知りたいと思ったからである。

しかしもともと「書くこと」が快楽である私は、こうした（注1）彫心鏤骨（るこつ）だけでは満足することができなかった。書きたいことを書きたいように書く――それも心ゆくまで書く――それ以外に「書く」快楽を満たす方法はないような気がした。

その頃、私は（注2）スタンダールが自分の墓碑銘に「生きた、愛した、書いた」という言葉を選んでいたことを知った。世の中には、自分と同じく、生きることが好きで、恋せずにはおられず、そのうえ書くことが(1)（　　）の快楽と観じた文学者もいるのだ――この思いは、私を幸福にしたし、自信を与えてもくれた。

スタンダールの自筆原稿の写真を見ると、あまり早くペンを走らすので、個々の単語が独特の省略法で書かれていて、よほど慣れないと判読が不可能だ。『パルムの僧院』を彼がふた月足らずで書いたことも、私を魅了した。

当時、大学に出かけてスタンダール関係の研究書を借りだそうとすると、よく大岡昇平氏が先に借りておられた。私は[d]書架の借出簿の上に書かれた氏の名前を眩（まぶ）しいもののように見たことを思い出す。私は大岡氏の[e]明晰で分析的な文章を当時何よりも愛していて、(2)それが（注3）スタンダリアンの手になったことに、ある誇らしい気持を覚えていた。

私はすでにその頃ピアニストが毎日ピアノを弾くように書く、ということを自分に課[A]していたのだと思う。小説の問題はまだ何一つ解決していなかったが、「書くこと」はそれとは関係なく私には一種の生理的な必要であった。私はノートにあらゆることを書きつけた。ただ書く楽しみのために書いた。たえず書きつづけた。考えるためにまず書いた。考える速度と書く速度が一致してゆくように書いた。（　ロ　）、何かを考えるとき、私は書かないと考えることができなくなっていた。

私は(3)文章そのものを見るということはなかった。私の視線は、つねに、自分の内部で動く想念（イデー）のほうに向けられていた。まだ言語表現をとらず、情緒を含んだ雲塊のごとき「思念の塊り[f]」にすぎぬものを、私はじっと見つめた。私はそれを言語の形で明晰に取りだし、それに本来の姿を与えること――それが「書くこと」の第一の目的だった。誰かに向って書くということはまったく意識されなかった。「書くこと」は自分のなかの暗い「思念の塊り」を言語の形で取りだし、心の外へ吐きつくすことでしかなかった。

（　ハ　）それを誰かが読めば、結果として、「伝達」ということは成りたつ。しかし「書く」ための動機（モチヴァシオン）は、あくまで心のなかのものを外に吐くことであった。それは吉田兼好と同じく、何か物狂おしい気持に[g]衝き動かされての行為であった。

そこから、当然の結果として、いかに文章が思念（イデー）を的確に[h]捉えるか、という問題が生れていた。私にとって「書くこと」は快楽であったが、それは、心のなかに[B]蟠（わだかま）る暗い[i]混沌たる思念（イデー）を吐きだすことの快楽、と言いかえてもよかった。（　ニ　）書かざるを得なくなる衝動とは、この内なる混沌とした塊りが、明晰な形で外に出たいという欲求に他ならぬ、というふうに私は理解していった。

思念（イデー）なしには文章はありえなかった。文章そのものを目的とした彫琢（ちょうたく）は考えられなかった。(注4)アランの散文についての考え方が私に大きな影響を与えたのもその頃だった。散文はあくまで透明で、思念（イデー）の姿を純粋に現前させなければならない。思念（イデー）が現前し、その前で文章のほうは消えなければならない。文章に耳ざわりな言葉、見慣れぬ言葉が混ると、そこだけ、文章自体に注意が惹（ひ）かれる。散文ではそうした古語、奇語の類は避けなければならぬ――アランの言葉はこの通りではないが、私が彼の言葉から理解したのは、このようなことだった。

(4)文章を透明にすること――それが「書くこと」の私のめどであった。平明であること、簡潔であること、明晰であること、この散文の三要素は「透明化」のために欠くことのできないものに見えた。

しかし私にとって大切なのは、そのような文章を書くということではなく、何を書いてもそうなるように、精神と身体とを訓練することだった。文章のほうは眺めず、つねに思念（イデー）のほうに眼をやりながら、ほとんど自動的に書かれる文章が、自分の目ざす形を保っていること――それが私の目標であり、願いであった。

しかしこうして文章を書きつづけているうちに、そこに自分の生理的な好き嫌いが働くことに気がついた。それは文章の個々の語彙にも言えた

が、主として文章を流れるリズムについて、とくにそうであった。私は、自分がいつかそういう好みのリズムに従って書いているのに気づくようになった。それと反対に、どうしても書く気になれず、書けもしないリズムがあった。

それをどう説明していいかよくわからないが、かりに心に固有の歌、調音というふうに考えてもいいかもしれない。人が固有の歌、固有の響きを文章の体質にしみこませるとき、そこに文体が生れてくる。つまり何を書いても、その文章が固有の調音を持っているとき、その人は文体を持つ、と私たちは言うのである。

そのことは文章が透明であることと矛盾しない。物を明晰に捉えることはその人の精神の態度であり、調音は心情に属する部分が多いからである。

昨年（一九七五年）、大学で文章論のようなことを講義したとき、私は学生たちに文章を書くよりも、まず(5)物事を明晰に分析的に見ることをすすめた。（　ホ　）それがある出来事なら、単に時間的な継起で摑(つか)むのではなく、その出来事を引き起した力――主導力と反対力の衝突――として把握することをすすめた。アルピニストが絶壁に[j]挑み、墜落するとき、彼の登攀(とうはん)の意志力、技術、体力と、重力、岩の硬さ、疲労などの反対力とがそこに劇的に対立して、ついに後者が勝利を占める、というふうに摑まなければならない、と私は教えたのである。

空間の印象でも、一挙に全体的な感じを直覚したあと、空間を分割して（前景、中景、後景というごとく）この印象を生みだした個々の要素を数えあげることを、私は、すすめた。文章の書き方よりも、こうした物の明晰な把握の仕方を学んだほうが、文章を書くうえに、より有効であるように私には思えたからであった。

文章には何よりも明晰さを、というのが現在も私自身に対する格律である。そのほか私が自分で守ろうとしているのは、できるだけ聞いてわかる文章を書くということであろうか。文章が孤独に黙読されるより、多くの人々に朗読されるほうが、いっそう自然であるように私には思えるからだ。これは(6)語りものを聞きながら育った私の環境の特殊性によるものかもしれない。

（辻邦生「明晰さについて」『辻邦生全集18』新潮社による）

（注1）彫心鏤骨＝苦心して詩や文章を磨きあげること。
（注2）スタンダール＝一七八三～一八四二年。フランスの小説家。
（注3）スタンダリアン＝スタンダール自身やその小説に関する深い知識を持ち、信奉している人々。
（注4）アラン＝一八六八～一九五一年。フランスの思想家。

問(一) 傍線部a～jの漢字の読みが間違っているものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

i＝ 20　　ii＝ 21

i　1 a「耽」＝ひた　2 b「嘗」＝な　3 c「語彙」＝ごい　4 d「書架」＝しょか　5 e「明晰」＝めいせき

ii　1 f「塊」＝かたま　2 g「衝」＝つ　3 h「捉」＝ふま　4 i「混沌」＝こんとん　5 j「挑」＝いど

問(二) 空欄（ イ ）～（ ホ ）を補うのにふさわしい言葉を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。（同じ番号を二度以上選んではいけません。）

イ＝ 22　ロ＝ 23　ハ＝ 24　ニ＝ 25　ホ＝ 26

1 むしろ　2 ついには　3 たとえば　4 なぜなら　5 しかし　6 もちろん

問(三) 傍線部(1)「（　　）の快楽」の空欄を補う言葉としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 27

1 無常　2 無状　3 無上　4 無浄　5 無情

問(四) 傍線部(2)「それがスタンダリアンの手になったことに、ある誇らしい気持を覚えていた」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 28

1 スタンダールを熱心に研究する人こそは、ピアニストが毎日ピアノを弾くように日々の努力を惜しまずに書き続けられるとわかったから。

2 筆者が借りるスタンダール関係の研究書を先に大岡氏が借りていたことを知って、尊敬する人と同じ本を手にできることがうれしかったから。

3 大岡氏の文章の筆跡が、筆者を幸福にし自信も与えてくれていたスタンダールの独特の省略法を使った書き方を、そのまま引き継いでいたものであったから。

4 大岡氏がスタンダールを熱心に研究していたために、同じくスタンダールを研究していた筆者にとって大岡氏の文章も理解しやすいもので

あったから。

5　筆者が好ましく思う文体で書く大岡氏も、スタンダールを熱心に研究していることを知って、自分の目ざしている方向の正しさが証明されたように感じたから。

問(五)　傍線部A「課していた」、B「蟠る」とほぼ同じ意味を表す語句を、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

A＝ 29　　B＝ 30

A「課していた」

1　許していた
2　負わせていた
3　薦めていた
4　強いられていた
5　任せていた

B「蟠る」

1　逆らっている
2　浮かび上がる
3　芽生えている
4　渦巻いている
5　かさばっている

問(六)　傍線部(3)「文章そのものを見るということはなかった」とありますが、筆者は何を見ていたのですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 31

1　未だ明確には言語化されていない自分の中にある想念

2　ただ楽しみのためだけに書くという生理的欲求
3　考える速度と書く速度を同じにするという行為
4　考えるための手段としての書くということ
5　スタンダールのようにできるだけ速く書くということ

問(七)　傍線部(4)「文章を透明にすること」とはどういうことですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 32

1　耳ざわりな言葉や見慣れない表現のない、平明な文章にすること
2　自分の好みのリズムに従って文章を書けるようにすること
3　日頃の訓練によって、自動的に文章を書けるようにすること
4　文章自体は注目されず、思念の姿だけが文章に現れるようにすること
5　平明、簡潔、明晰という三要素をもった文章を書けるようにすること

問(八)　傍線部(5)「物事を明晰に分析的に見ることをすすめた」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 33

1　多くの人々に朗読される、自然な文章が書けるようになるから。
2　思念を的確に表現する文章を書くのに有効な方法だから。
3　耳で聞いてわかる文章を書くことの大切さを得心できるから。
4　空間の印象を生み出した要素を数え上げることができるから。
5　物事の全体的な感じを一挙に直覚した文章が書けるようになるから。

問(九)　傍線部(6)「語りもの」のジャンルの一つに説経節があります。その一つをもとに『山椒大夫』を書いた作家を、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 34

1　夏目漱石　　2　永井荷風　　3　幸田露伴　　4　谷崎潤一郎　　5　森鷗外

問(十)　本文の内容と合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号をマークしなさい。（解答の順序は問いません。）　35・36

1　筆者は子供の頃から文章を書くことが好きであったが、課目としての作文を得意としていたわけではない。

2　筆者は文章を書く際に、明晰さ及び聞いてわかるということを重視し、それを守りながら文章を書いてきた。

3　苦労して文章を書くことは偉大な作家の印であるような気がした筆者は、自分の能力の貧弱さを感じた。

4　筆者は文章を書くリズムに、生理的な好き嫌いがあることに気付いたが、職業として書くときにはそれに従わないようにしている。

5　スタンダールの墓碑には「生きた、愛した、書いた」と刻んであるが、その言葉がそのまま彼の指針であったかどうかはわからない。

6　文体とは、人が心に固有の歌、固有の響きを文章の体質にしみこませるときに生じるものである。

設問は以上です。